シリーズ❷
授業をどう変える!?

ビジュアル解説
小学校特活

特別活動の価値を再認識しよう！

筑波大学 教授
藤田 晃之

特別活動（学級活動，児童会活動，クラブ活動，学校行事）では，学級や学校での生活をよりよくするため，互いのよさや可能性を発揮できるような集団活動がなされます。大人になってから小学校時代を振り返るとき，印象深く思い出されることは，特別活動であることが少なくありません。運動会，合唱祭，宿泊学習，委員会活動……これらは全て特別活動の一環です。この意味で，特別活動は小学校教育を代表するといえるでしょう。

また，多様な集団活動において一人ひとりが役割を担い，主体的に行動し，責任を果たす中で，社会に参画する力や自治的能力が育まれます。しかも，特別活動は各教科等での学びを実際の場面で総合的に活用して実践する機会ですし，同時に，特別活動を通した体験的な学びが各教科等での学習の土台ともなるのです。特別活動と各教科等は往還的な関係にあります。

「特別活動に関する指導力は，小・中・高等学校の全ての教員に求められる最も基本的な専門性の一つである」と指摘されていますが，まさにその通りであると思います。

新学習指導要領で整理したこと

文部科学省教科調査官
長田　徹

特別活動（特活）については，中央教育審議会で 2 つの指摘がありました。1 つは，特別活動の方法原理である“為すことによって学ぶ”が曲解されて，“やればいい”となってしまっており，例えば，運動会や学芸会をすることなどが目的化してしまっていないかということです。そうなると，評価が，「満足した」「感動した」「保護者や地域の人が喜んでいた」というようになってしまいます。これは本末転倒です。そこで，これまでの特活の目標などを整理し，「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」という指導上で重要となる 3 つの視点に整理しました。

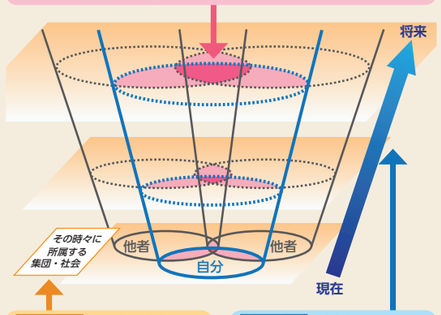
もう 1 つは，学校教育全体の中での特別活動の役割や，どういう学びのプロセス・学習過程を踏むことが大事なのかという，これまであまり明確にされていなかったことの整理です。特活で学んだことが，各教科と往還していくはずだということのおさえと，自己決定と集団決定をよく使ってきましたが，これを整理し直して，学級活動の（1）は合意形成，（2）は意思決定，（3）はキャリアに関わることなので意思決定という学習過程を整理しました。

特別 対談

Special Talk

資料 1 特別活動で育成すべき資質・能力の視点

人間関係形成　「個と個」が「個と集団」の関わりの中で，互いのよさを生かし，協働して取り組み，よりよい人間関係を築こうとする視点。



社会参画　現在や将来に所属する様々な集団や社会に対して積極的に関わり，よりよいものにしていこうとする視点。

自己実現　将来を見通し，今の自分にできることを考え，よさや可能性を生かして実践しながら，よりよい自分づくりを目指す視点。

資料 2 特別活動の学びのプロセス（例）

【特別活動】「6年生から引き継ごう」を機に5年生中心に。

5年3学期の目標設定	もうすぐ最高学年だから，今のうちにはずかしくないようにがんばりたい。
教師との対話	「今のうちに」という言葉に自覚の高まりを感じます。最高学年として当たり前のことを当たり前に行いましょう。
6年1学期の目標設定	周りの人とちゃんと話したり，相手の話を聞いたりする。あいさつをする。
振り返り	人と話すとき，目を見て話すことができた。自分からいろんな人にあいさつができた。
6年2学期の目標設定	最高学年としての言動を意識する。移動のときなど，周りの様子をよく見る。

（東京都世田谷区立尾山台小学校の例）

特別活動の「見方・考え方」について

藤田　特別活動の見方・考え方が「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」という3つのキーワードで整理されましたが，この3つの関係性を分かりやすく教えてください。

長田　その3つは，順序をつけられるものではありません。さらにこれらの3つの視点は学習指導要領が目指している資質・能力の3本柱である，知識・技能，思考力・判断力・表現力，学びに向かう力・人間性の全てにあてはまっていきます。これら視点を大事にして，子どもの資質・能力を育てていきましょうということなのです。（資料1）

特別活動で，この資質･能力を育てるにもポイントがあります。「知識･技能」に偏ると特活らしくなくなってきます。「思考力･判断力・表現力等」は話し合い活動が馴染みます。さらに，「学びに向かう力・人間性」は，まさに特活の肝なのです。もちろん，後者の2つが大事で，特別活動における「知識・技能」を軽視しているのではありません。

学習のサイクルやプロセスについて

藤田　今改訂で特活の目標が，（1）（2）（3）にかき分けられました。特活の見方・考え方というのは,そのどれにも当てはまるということなのですね。では，学習のサイクル・プロセスはどのように考えればよいですか。

長田　これまでは，教師個人の経験に左右されたり，45分という学級活動の中に，このプロセスがすべて入っていなくてはならないといった誤解があったりしました。今回，学習指導要領の解説の中で，45分の中で学びのプロセス全部を織り込む必要はないことを明記しています。事前の指導，本時・実践，振り返りという1つの活動（学び）のまとまりの中で，そういったプロセスを明確にしていきましょうとなったわけです。小学校の場合はこれまでやってきた45分の中で，意思決定を大事にするのか合意形成を大事にするのかということをまず意識して，学びのまとまりの中で，解説に示したようなプロセスをちゃんと踏ませてほしいということなのです。（資料2）

一人一人のキャリア形成と自己実現

藤田　学級活動について伺います。今回新たに（3）が突然入ってきました。この経緯を教えてください。

長田　中高にはこれまでも,「（3）学業と進路」がありました。進路指導は，そもそも一生続く人間形成のことを指しているので,それは小学校にないわけはありません。小学校にもキャリアの視点は大事ということで,「一人一人のキャリア形成と自己実現」という表現で内容項目を置き，学びが小学校から高校までつながっていることを先生方にも子どもたちにも認識してもらおうという意図です。

藤田　特別活動だけ見ていくと，キャリア教育について見えないところもありますが，総則も合わせて見ると,「特別活動を要として」と書いてあります。このことはキャリア教育の実践ということで見ると，どういうことなのですか?

長田　国際的な学力調査の結果を見ると，日本の子どもたちの基礎学力はとても高いのです。ところが，この学びが生活や将来につながっているかとか，学び同士がつながっているかという調査結果は，相当低くなっています。教科間の垣根があったり，行事が単なるイベントとなったりして，生活につながらないということです。もちろん教科や学校行事というまとまりは大事です。しかし，“これって，つながっている！”ということを特別活動を通して伝えられないでしょうか。先生方には，特活の学びが教科の土台となり教科の学びが特活で生きるということを実感させてほしいと思います。（資料3）

「キャリア・パスポート」について

藤田　学んだことを振り返りながら，新たな学習や生活への意欲につなげたり，将来の生き方を考えたりする活動を行うことが大切なのですね。学習指導要領では，そのような活動を行う際に「児童が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること」と定められています。そして昨年3月末には，この教材の全国的な名称として「キャリア・パスポート」と呼ぶ方針なども示されました。なぜ「キャリア・パスポート」が必要なのですか?

長田　すでに，どの学校においても児童の記録を丁寧に記録・蓄積していただいているはずです。いわゆるポートフォリオです。こんな“宝”がどの学校にもあります。しかし，これらの記録は学年や校種を超えず，今だけの“宝”になっています。学びのつながりの実感や学校段階間の接続の重要性が叫ばれる中で，これを人生の“宝”にしてあげられないか，これが「キャリア・パスポート」の趣旨です。

但し，児童の記録を全てを持ち上がることは，物理的にも不可能ですし，無用の長物にもなりかねません。そこでポイントになるのは，学年末や卒業時における記録の「取捨選択」や「再編集」というひと工夫なのでしょう。どれを持ち上がり，どれを家庭に持ち帰らせるのか，そのような工夫により，学校内外での学びの横をつなぎ，小学校から高校までの学びを縦につなぎ，子どもたちにとっては自己理解，教師にとっては児童理解につなぐというものなのです。（資料4）

ビジュアル解説
小学校特活

資料 3 教科での“振り返り”をキャリアに！

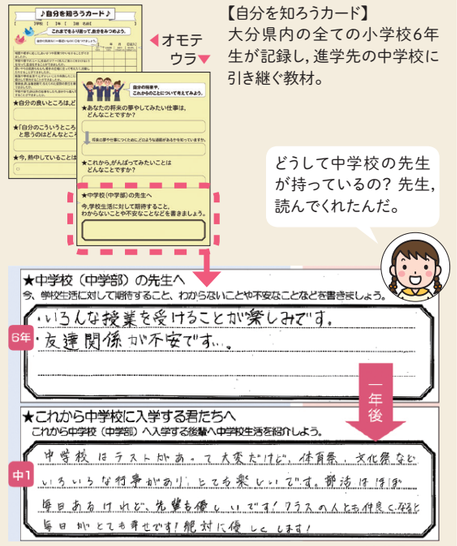
各教科・領域における活動の中にある，自分の考えを振り返ったり，表現したりする機会を活用する！

【算数の振り返り】
- 新しく気づいたこと
- 自分の考えが変わった理由
- 友達の考えを聞いて思ったこと
- 学び合いを通して感じたこと
- 次に学びたいこと

（秋田県大館市立城西小学校の例）

低学年では，上に示した項目で振り返りの手がかりを示しますが，学年が上がるにつれて，子どもたち自身の発想で行うように促します。こうして培った「振り返りの力」を例えば，異学年交流の場面では，上級学年の児童が行う様子を下級学年の児童に見せ，自身の今後を見通す機会としても位置づけるなどしています。

資料 4 中学校で“宝”が生きた事例



【自分を知ろうカード】
大分県内の全ての小学校6年生が記録し，進学先の中学校に引き継ぐ教材。

（大分県の例）